
聖ノ性

黒瀬ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖ノ性

【Nコード】

N2388Q

【作者名】

黒瀬ハル

【あらすじ】

世界ではかつて、多くの種族が共生していた。

大きく分類して、人間ヒト 妖あやし 魔導師ソーサラー。

だが、均衡状態は数年前に崩され、世界規模の戦争が繰り広げられた。

停戦状態となった今、各部隊に所属する戦士や術者たちは、近くの村や町から依頼を受け、報酬をもらい、それを生活費に活動していた。

01・世界

目の前で泣いている男の子

それはかつての自分

それに手を差し伸べる義兄の姿

いまと変わらない 笑顔を浮かべて

「隊長」

声がきこえる

「隊長？」

少女の声。

何故？目の前にいるのは確かに

「^{ゼロ}零様！」

その一言で、風景が一瞬にしてかわる。

周りをかこんでいたのは、見慣れた自室の壁だった。

銀色に青いメツシユのかかった髪、透き通った海色の瞳。

手元にあった鏡にうつされた自分の姿をみて、ホッと一息。

「夢でもみてたんですか？」

差し出された手は、義兄のものではなかった。

「ユラ・・・？」

「お客様が」

その笑顔は可愛らしい少女のものだった。
名をユラといった。

「ちゃんと洗濯できてますから」

机の上にたたんであるコートに視線を向け、静かな声でユラが言う。

「洗濯したのお前じゃねーだろ？」

軽く笑いながら、たちあがる。

ユラは見た目は家庭的だが、実際はかなり不器用で、まともに家事もできない。

だから、こういうのは得意なやつにうちの部隊専属でやらせている。

「言伝です」

何度よんでも起きないって言われたから私が起こしに来たんです」
呆れ顔のユラが、そっぴいなながらドアに手をかける。

「はやくおりてきてくださいね」

「何で名前呼んだの？」

出て行くこうとするユラをとめるかのように、言葉を投げかける、零。
ふりかえるユラ。

「起きないから」かすかに頬が赤い。

普段、ユラが俺のこと

名前で呼んだりなんかしない。

しかもまさかの様付け。

さすがに驚いた。

普段、俺のことをそうやってやぶやつは一人しかいない。

思い出すから、やめてくれ。

「ロセさんのことでも思い出しました？」
吹き出す。

くすくすと笑うユラ。

本当こいつは 何でも知ってる。

「それより、急いでくださいね。お客様がいらっしやるんですから」
客？

「その・・・うちの部隊に入りたいんだとか」

*

応接間。

”お客様”は、意外と小柄だった。

入りたいんですっ！と、いろんな意味で熱心。

「えっと、ここが何するところか、知ってます？」

近くできいていたユラが問う。

さすがにいきなり、入りたいと言われても。

「それくらい知ってます・・・」

上目づかいが可愛い気もするが、ユラのほうがいい。

なんて考えていると、ユラに睨まれた。

「この世界ではかつて 多くの種族が共生していた」

大きく分類して、人間^{ヒト} 妖^{あやし}魔導師^{ソーサラー}。

その三つはこの世界の三大勢力といわれていた。

だが

六年前のある日を境に 保たれていた均衡が崩れ出した。

魔導師^{ソーサラー}が大陸全土を独占しようとしたのだ。

繰り広げられる壮絶な戦い。わずか数か月で世界規模にまで及んだ。

そして人間^{ヒト}は 魔導師に対抗するため戦士や術者を集めた。

集められた者たちはそれぞれ”部隊”を結成した。計、十六部隊。

「結構知ってるんですね・・・」

「一般常識じゃないですか」

笑顔を見せる客、というより少女。

「でも、いくつかの部隊の標的は、魔導師から妖に変わっちゃったんですよね。」

哀しげに微笑む。

それを零は黙って聞いている。

しばらくの沈黙のあと、ユラが口を開いた。

「妖狩り」

ただ 一単語。

それは、今から四年前におこった出来事。

ヒト人間も魔導師も

手始めに妖を殲滅しようとしたのだ。

滅ぶまで、わずか一年だった。

人間、または魔導師の血の混ざった”半妖”と呼ばれる者たちは

いくらか生き残っているという説、いや 事実もあり、

実際に零とユラにも、半妖の知り合いがいた。

それ以来、数年間停戦状態が続いて今に至る。

それぞれの部隊は、近くの村や町から依頼を受け、報酬をもらい、

それを生活費に活動していた。

「それで、ここが第八部隊」

嬉しそうに話す少女。

「ああ、うん 理解してることはわかった

で、なんでまたうちに？」

零が苦笑する。

こんなひ弱そうな少女、役にたつのだろうかと考えて。

「助けていただいたんです」

本当に 嬉しそう。

何がそんなに嬉しいのか、零にもユラにもわからない。

「金髪のお姉さんなんですけど、私が危なかったところ助けてくれてそれで、その人がここに入ったりしてるのが見えたんです

だから、私も是非ここで」

次々と言葉を紡ぎだす。

「えっと、ここですって…… 助けてもらってるようじゃ駄目なのよ？」

危ない仕事とか…… やってるから」

と、ユラ。

目があわないうようにしているのが まるわかりである。

危ない仕事……

ていうか仕事してねーし…… と、自嘲的に笑う零を少女は見つめる。

「駄目……ですか？」

うるんだ瞳、子犬のように。

どうにか話を逸らせないかと話題を探る零。

「金髪のお姉さんって、レイラですか？」

零の考えをよんだのは、案の定ユラ。

「え？名前は……わかりません」

レイラって名前にぴんとこないのか……

ミクルラム出身ではない、と。

顔を見合わせる零とユラ。

ミクルラム、隣国である。

今我々のいる第八部隊本拠点は国境沿いにあるため、徒歩で10分かからずしていける。

我が第八部隊、

ミクルラムの王城付近に根をはる第五部隊とは、比較的仲が良い。ほかに東の国々のいくつかの部隊とも、同盟を結んだりしている。

東つていえば、第三部隊は距離もあるし、

仲良いのか悪いのか微妙なところなんだよな。

「ねーえ 零いるうー?」

不意に扉のあく音がした。

玄関先に仁王立ちするは、丁度はなしていた第三部隊の

「まつりさん……」

ユラの顔が青ざめる。

「あーっ!お姉さんだーっ」

少女の表情はユラとは正反対。

「え?助けてもらったって、こいつ?」

「はい!」

零の顔色も悪くなっていく。

不思議そうに見つめる少女。

誰って顔をするまつり。

まさか忘れたのか?

「あのっ この間ありがとうございますあ!」

「んー?あー、いやー いいよー別に」

あ、覚えてた。

「でさあ、零お?何か僕んちにこれ届いてたんだよね」
とりだす一通の封筒。

宛先はきちんと第三部隊になっている。

ユラが何かぶつぶつ言っているが、あえて気にしないでおいてあげようか。

「何、それ」

面倒くさそうに受け取る零。

にやにやと笑うまつりに、少女が尊敬の眼差しを向けている。

「……月夜靈^{つきよみ}?」

零がその言葉を口にした瞬間、ユラがかたまった。

目を見開く。そして、震えだす。

「ごういのは、ここのが詳しいでしょ?てことで、ついでに依頼
やっちゃってね」

「お前本当いやなやつだな まーでも、情報提供感謝するよ」

少女は完全に忘れ去られていた。

そのことに、ユラが気付く。

「あの、入るんなら、第三部隊に入ったらどうですか?」

脳内を”月夜靈”という言葉が駆け巡る。

はやく、この少女に帰ってもらいたい。そして零と二人きりで、話
したい。

「入るって、何それ?」

きよとんとするまつり。

「察せよ なんか助けてもらったから入りてんだってさ 第三部隊
?でいいよな?」

「あ、そお?」

再びによによするまつり。

「じゃあうちでゆっくり話そっか?」

ぱあと明るくなる少女の顔。

そして、少女の腕をぐいと引っ張り早足でその場を去る。

後ろ姿が見えなくなるまで見送ってから

零とユラは再度顔を見合わせた。

*

「あの、なんでそんな急いでるんですか?」

まつりと歩きながら 少女が問う。

「邪魔しちゃ悪いじゃん？あの二人らぶらぶだからあ」

02・依頼

資料室

ユラは、部屋の奥のほうにあつた本棚から、一冊のファイルを取り出す。それを無言で見つめる、零。彼の手には、先ほどの依頼書。この二人きりの空間で交わされた言葉はまだひとつもなく、ただ真剣な表情でそれぞれの作業をしていた。最も、零は時折依頼書をよみかえしては、ユラの様子を眺める、ただそれだけだったのだが。

しばらくして見つけた資料を、ユラは零にしめた。そして真っ直ぐに見つめる。

それは暗黙の了解であり、やはり無言でうなづく。資料をうけとる。

大きな字で”月夜^{つくよみ}霊”と書かれたその紙を小さくたたんで依頼書の封筒にしまう。

ふと、零が口を開いた。

「・・・一枚だけ？」

ポケットに封筒をしまいながら、尋ねる。

「おそろく」

表情ひとつかえず、ユラはこたえる。

部屋の中を見回す。天井まで届く本棚で埋め尽くされた部屋。入口付近に机がおいてある。

「あの人に関する情報は、そう簡単には手に入りませんかからね」
棚に手をのばし、適当に一冊とりだす。

そしてページをばらばらとめくっていく。

題名も内容も確認せず、ただめくるだけめくり 元の場所へしまう。それを繰り返す。

「案外」

そんなユラに、零が言葉を投げかけた。

「案外、簡単かも知れないよ?」

「え?」

この部屋に入ってから、初めてユラの表情が変わった。

手にもっていた本をすばやく棚に戻すと、ユラは零に歩みよった。

先ほどポケットに突っ込んだ手を片方だしながら、零は自嘲的な薄笑いを浮かべる。

人差し指で自らの頭を指す。

「誰かが 知っていると?」

「第五部隊で前調べてたらしいからね、もしかしたらあの二人が何か知ってるかもな?」

あと、第十部隊第十部隊の副隊長だって、多分」

「私たちよりもですか?」

途中で遮った。

鋭い視線を向け、ユラは続ける。

「私たちよりも・・・月夜霊に詳しい人がいますか?」

沈黙が流れる。

顔にこそ現れていないが、零は考えている。

だが、こたえはすぐにでた。

「いるかもしれねー・・・んじゃね?」

あれでも一応、国際指名手配だから」

凄いことをさらりといったように聞き取れるが、ユラはあえて気にしない。

それよりも、気になることがあるからだ。

「思ってたんですけど、依頼主ってどんな人なんですか?」

あの人に興味があるってことですよな?結構細かいことまで知っ

ているようですが」

「だが・・・結構知っていると何故まつりんとこに頼んだ？
つまり、知ってても身内ではないということだ 匿名だったしな」

「あつれえ、二人で何やってるんですかあ」

不意に甲高い声がした。

入口にたっているのは、金髪の少女。

「レイラ・・・お前国に帰ってたんじゃ」

零の冷や汗。

「依頼？うん、それが情報不足だったから 調べにきたっすー！」

「どこで覚えたその喋り方」

うるさいのが帰ってきた・・・そんな目でレイラを見る二人。

「ていうか依頼じゃねーだろ？何か盛大なパーティーやってたんだっ
て？お前んち」

「え？」

え？違うの？

隣国の王城で何かやってるってきいたんだが・・・
参加してたわけじゃなかったのか？

「あの、何の依頼してるんですか？」

ユラが尋ねる。

「よくわかんないんだよねえ。」

依頼書らしきものをとりだし、首をかしげるレイラ。

「アルヴェドで傷害事件だった」

なんか、聞き込みやってみたら、犯人は赤い目をした男だっ
って人かいてね」

「赤い目をした男？」

アルヴェド＝アリオ村、つい最近合併したミクルラムの村のひと
つ。

町っていつでも良いくらい、活気はあるんだがな。

にしても、赤い目？

あまり知り合いにいない気がする。

目の前にユラっていう、赤眼の女はいるんだが。

最も、それは左目だけで もう片方は数年前に事故でなくして以来、眼帯で覆っているのだが。

ん・・・？・・・ユラ？

こちらをみている。祈るように。

それにレイラも気が付く。

だが彼女に空気は読めない。

「ユラちゃんって弟いたよねえ」

「いますよ」

能天気なレイラに、無感情な声で答えるユラ。

「あつても」 まさかひとを傷つけるようなことはしないよねっ？
偶然赤いだけだよね？」

「だと良いんですけどね」

ユラ・・・？

何故そんな曖昧な答え方をする？

「どんな傷害なんですか？」

「ん」 火傷みたいな鞭みたいなの・・・」

目が見開かれる。

覚えがある。この目でみた、覚えがある。

そして喰らった経験もある。

それはユラも同じであろう。

「え、まさか」

レイラももしかすると、知ってるかもしれない。

ユラの弟が使う「技」のことを。

「レイラ、聞き込み続けるんならさ・・・」

真っ白な髪をした少年がそばにいなかったか、聞いてみて」

「真っ白？」

零を見るレイラ。だが、その髪にはかすかに灰色がかかっている。

真つ白の真はつかない。

「それ、染めたんですか?」「は?」

「メツシュ」「生まれつき」

「うそ」「嘘じゃねーよ」

「ありえない」「現にありえてる」

「何で急にそんな話になるんですか!」

珍しくユラが怒る。

「今は隊長の髪の話なんてどうでもいいじゃないですか。

それより何で鴻くんのことを・・・」

鴻、真つ白な髪をした少年ときいて彼を思いだした。

確かにあの二人は所属部隊が一緒だからいつも一緒にいるけど・・・

だからこそきくんだろうけど。

もし本当に鴻くんまで関わってるとしたら、100%犯人があいつになるじゃない。

もしかしてそれを望んでいるの?

「鴻なら月夜霊のこととしてそうじゃね?」

・・・はい?

「あいつらの情報網には俺も一目おいてるし」
話、そらすんですね。

「月夜霊ってあの賞金首?」

レイラにはその程度の認識・・・。

確かに、彼は今全世界で有名な指名手配だけど
私たちにとって彼は罪人なんかじゃない。

あの人は・・・

「ユラちゃんもしかして賞金稼ぎにでもなりたいの?」

「いえ、彼に関する依頼がきていたもので」

「ふーん じゃああたし、もっぺんアルヴェド行くからね」

「あ、はい お気をつけて」

あまり気にかけないでくれてよかった。

レイラの姿がみえなくなってから、零が口をひらいた。
「聞きに行こうか」

「鴻のとこ」

03・記憶

「え、早っ・・・ もう取り返してくれたの、これ？」
集まった村人たちが笑顔を見せる。

囲まれるのは、二人の少年。

「やっぱりあなたたちに頼んで正解だったわね。ありがとう」

「いえ、またいつでもご相談ください！」

一人は親しみやすく もう一人は無言で隣にたっているだけだった。

村の出口までおくってもらったあと、二人は帰路についた。

「そういえばこの間、城で何か騒いでたのって、何だったんですでしょう？」

「は？ああ、王城のパーティか？何か王女様が帰ってこなかったんだとよ」

「へ？毎年いないんじゃないんですか？」

「はあ・・・ 年に何度かは戻ってきてイベントにだけ出席してたんだよ」

相方の理解力の無さに呆れる少年 彼の目は、赤い。

「へえ〜 人騒がせな王女様ですよ〜 今零んとここにいましたよね、確か？」

「ああ」

片方の無感情さにより、中途半端に話が終わってしまった。
しばらく沈黙がながれたあと、

「ピコってさ」

と、赤眼の少年に声がかけられた。

ピコと呼ばれた彼は、視線で答える。

「第八部隊嫌いでしょ？」

いきなり敬語でなくなったことに、違和感は覚ええない。慣れているから。

だが、経験上 敬語を使わずにはなすことは、真剣な話であること
もわかってる。

「思うんだけど、鴻とみ、お前何でそんなあいつらに依存してんの？」

もう一人の少年の名は 鴻とみ。

白い髪、白い肌、小柄で華奢。

「確かに俺は嫌いだよ？いつも妙に勝ち誇ってる零も・・・姉貴
も」

うつむく。

目を合わせぬようしているのだろう。

「同盟関係とか何それ？利用されてるだけとしか思えねえ」

声に感情がこもることはなく、ただ淡々と愚痴をこぼすピコ。

それを鴻は黙ってきいている。

「ていうか、今更だよね？」

「うん 知ってたけどね」

やはり敬語は使わない と思いきや

「依存とか、そういうんじゃないですよ 僕はその人たち、結構好
きですよ？」

素直で

「お前何気黒くね？」

「そうですね？」

だが目は合わせない。

鴻は楽しそうだが、ピコは無表情だ。

しばらくして、城が見えてきた。

それを目印に、少し北へいったところに拠点がある。

城を囲む木々のおかげで大して目立っていない。

その拠点、ほかのどの部隊よりも小さい。

何せ四人しか住んでいないのだから。

隊士の数はそこそこいる。ただ、幹部が少ないだけだ。

何故って、うちの隊長、鴻とみは強さをもとめていないから。

ただ、身内同士楽しくやっていけばいいと思っている。

だからいつまでたつてもなめられるんだと、ピコはつくづく思う。だが、鴻の実力を誰よりも知っているため、口出しはしない。

その実力、

零や姉の師匠もかなりの腕だが、それと同等、もしくはそれ以上だと認識している。

この身でくらったんだから・・・わかる。

身内とはいうが、気付いたらそこにいたから仲が良い、そんな感じだった。

鴻についていったら、もう二人いた。だから、正直いってほかの二人のことはあまりよく知らない。

俺が鴻に出会ったのは・・・ そうだ、右目を失ったとき。

意識を取り戻したら、俺は病院にいて どうやら姉貴と一緒に事故つたらしくて

何故かそこに全然知らないやつがいた。

それが鴻。

正直そのときは記憶が曖昧で、パーソナルデータがいくつかぶつとんだらしく

今になつても自分の生まれた年が思い出せない。

月日は、零が知っていた。だが、年齢は誰にも教えたことがなかったから わからない。

それは姉貴も同じらしい。

どうやったら外傷も記憶障害も同じになるのか 不思議でたまらないのだが。

そしてその場にいた気弱な少年が気に入らなかった俺は攻撃をしかけ、見事に返り討ちにあい

今 こんな関係。

普段温厚そうに見えるそれは、計算ではなく 自然体。

実は強かった ただそれだけ。

そのときにはもうすでに、あの二人はいた。

俺よりさきに、鴻に出会ったのだろうけど 詳しいことはわからない。

だけど、お互いに細かいことを気にしようとはしなかった。

そうこうしている間に拠点、いや 我が家と形容しておくべきか。に ついた。

いつものようにサンドバッグを殴っている少女と、機械のように仕事をこなす中性的な顔の女が待っていた。

「あっ、ピコ様アツ、おかえりなさいませえ」

最後に思いつきりサンドバッグを蹴り上げてから、こちらによってくる少女。

暑い日だろうが寝るときだろうがマフラーを外さない、変な奴。

まあ、風呂では脱ぐだろうが、異性だから見れないしな。

「どうでした？大丈夫でした？」

鴻を完全無視している少女。

鴻も気にせず、奥へ入っていった。

「あ、あ、心配してましたあ」

「あ、そう ありがとう」

毎回心配されても有難迷惑なんだよな。面倒くさいし。

心配性なのか、なんなのか。

母性本能、っていう言葉をきいたことがあるんだが 女だから心配するのか？

ピコは少女の目にハートマークがうつっていることには微塵も気付かない。

「それより例の件、調べておいてくれた？」

「ん？」

「第一部隊の」

「あー！そうそう！第一部隊の幹部について調べたらね、面白いことがわかったんですー！」

目をキラキラさせる。

期待して良いのだろうか。

「四・天・王！」

「四天王？」

「隊長、副隊長に加えて 強いのが4人いるんですって！」

「それで四天王」

そこでいったん話が途切れる。

・・・え？

「それだけ？」

「ん？」

やっぱりこれだけか・・・。

こいつ、集中力と記憶力がどうもないらしい。体術に関しては俺も

一目おいてるんだがな・・・。

やっぱりあつちに頼むべきだったか・・・。

機械をいじるもう一人のほうを横目で見て、ピコは思う。

何故第一部隊についての情報をもとめているのだった？

そんな感じの依頼がきていたから。

第一部隊、噂にきくと相当強いらしいから 調べておいてもらおう

と思つて、こいつに頼んだ。

だが・・・ やっぱり駄目か。

でもあの機械女に頼むと金銭要求されそうだし。

・・・鴻は？

結構いろいろ集めるよな。

・・・ 鴻ならなんか知ってんじゃないのか？

「ごめん ちよつと」

「ええっ？！どこいくんですか？！」

「鴻に急用」

「あれっ 隊長帰ってきてたの！」

さつき一緒にはいつてきただろ・・・。

そんな影薄いようにも見えないけど？

こいつやっぱりおかしいわ、前々から思ってたけど。

えっと 鴻はどの部屋入ったんだっけ？

04・交換

第五部隊のインターホンがなった。鍵がかかかっていなかったため返事をする前に客は入ってきた。

「よう、ルノ。鴻とみは？」

「零せろさん！ユラちゃん！」

扉をあげようとしていた先ほどのサンドバッグ少女、ルノが目をみひらく。

「あー隊長なら奥の部屋ですよ。どうかしたんですか？」

「ああ、ちよっと用があつてな

．．．入っていいのか？それか、呼んでくれないかな」
だが、呼ぶ必要はなかった。

偶然にも ちようど、ピコと二人で部屋からでてきた。

会ってすぐ睨みあうユラとピコ。

お茶をくみにいくルノ。

よくわからない沈黙がしばらく流れたあと、鴻は来訪者に椅子をすすめた。

「．．．月夜じつぐよ霊みのことなんだけど」

その言葉に、奥のほうで機械をいじっている女の人も、お茶をくばっているルノも、反応する。

「お前、何かしらね？」

「何かつて？」

「．．．．何でもいい

とりあえず、あいつについて知ってることがあつたら教えてほしいんだ

そのかわりといつては何だが．．． お前ら確か第一部隊に興味あつたよな？」

「何かしつてるんですか？」

「まあ、少しだけ」

重い空気のなか、

資料も何も見ず、鴻は話し始めた。

「月夜霊つぐよみの所属する第十部隊ですが、各地に拠点をかまえています。わかっている限りで、6カ所。副隊長のなちと動き回っているようです。」

まあ、指名手配されていますから、カモフラージュなどされていて詳しい場所がわからなかったりしますが……。」

「6カ所？そんなに？」

やはり逃げ回っているのだろうか？

「月夜霊の出身地……たしか零もそうでしたよね？ルザ。」

あそここの北西にある山のなかに1つあるらしいですよ。」

……え？

コラとピコも反応する。

黄泉和よみかたルザ村の北西の山奥……。

俺とあいつとこの二人で、幼いころ暮らしていた場所。

そんなところに、拠点を？

確かにあの場所は、俺たちくらいしか知らないだろうが……。何故？

「あと、副隊長なちの出身地がわかりました。」

アロールナの城下町 つまり大陸の最北端です。」

アロールナといえば第二部隊だな……。

うちとの交友関係はないが第六部隊もいる。

それなのに何故、月夜霊のところには？

「これに関しては信憑性が薄いのですが……」

四年前に山奥で行き倒れているところを月夜霊に拾われたと。

そのときにはもう右手はなかったらしいです。

義手をつけてあげたのはおそらく月夜霊ですね。」

「いや、信憑性はある。」

それにしても四年前…… 妖狩りの年か」

「なちは妖か魔導師ソーサラーのクォーターだつて言われてますしね……」
「関連性ありそうだな」

月夜霊と俺とユラとピコは昔、一緒に暮らしていた。
たしか、八年ほど前だ。

俺の村で、コソ泥騒動があった。

犯人の顔と名前はすぐにわかった。

近くの山に暮らすという、俺と同じくらいの年ごろの少年だった。
それが月夜霊。

ある日そいつが囲まれて……

衝動的に、俺は彼を助けていた。

それ以来、家も親も持たなかった俺は彼の家に居座ることになった。
あいつの家つていつても、向こうも家族はいなくて一人でやってたんだが。

そのころは兄のように慕っていたんだがな……。

形はどうあれ俺をひろってくれたわけだし、なちをひろったっていう説があってもおかしくはないだろう。

六年前のユラとピコの事故で 別々になったが。

ユラとピコとの出会いは比較的面白いと思う。

……いや、面白かったのは俺だけかもしれない。

月夜霊の術者としての腕前をききつけたユラが、勝負を挑みに来て
返り討ちにあい

そのまま弟子入りしたつてだけなんだが。

今は温厚なユラの当時とのギャップは、思い出すと笑えてくる。

ピコモユラについてきた。

姉を負かした人間に興味があったのだろう。

俺や月夜霊についてまわっていた。

鴻とぎに会ってから二人とも性格が急変したと思う。

真逆になった……といっても過言ではない。

「なので、第二部隊が今、アロールナに拠点がないか探してるらしいですよ？」

鴻によって回想がうちやぶられた。

「え？んと、何だっけ？第二部隊が？」

「アロールナといえば二でしょ？だから、調べてくれるって」

「調べてくれる？あそこが快く引き受けてくれたのか？」

「零のこと説得するっていったら」

「てめーなあ・・・」

何の説得すんだよ。この間誘い断ったことか？

第二部隊の隊長、どこぞのお嬢様らしいが、

何かいるいると、しつこい。

ユラを恋敵とよんで俺に付きまってくる。

まあ、頼れないこともないんだが。

第二部隊っていったら、貴族の集まりだからな・・・ それとそ

の側近。

実力的にはどうなのって、正直思う。

「何でそんなに気にするんですか？」

「ん？」

「月夜霊」

「いや・・・ まあ、いろいろと会ってな」

「あなたの義兄だということは存じてます

ですが・・・ あまり関わると零まで」

「俺はいい

・・・俺は、いいんだ」

言葉を遮り、立ち上がる。

不安そうにみつめるユラを、睨み続けるピコ。

零は内ポケットから一枚の封筒をとりだすと、それを机の上におい

た。

「第一部隊の情報だ

ありがとな、鴻」

「ああ、はい こちらこそ」

中身がはいっていることを確認し、ルノに渡す。

「じゃあ」

椅子をひいて出口へ向かう零に続いて、ユラも一礼してから立ち去った。

二人の姿が見えなくなったあと、鴻の表情を確認するピコ。だが、そこに感情はなかった。

05・信用

黄泉和、ルザ村。
よみかた

村に関してはいろいろと発達しているのだが、交通に関しては不便である。

その原因は、国の地形にある。

黄泉和という国自体が、山の集まりであり、

城下町付近やルザ村は盆地になっているため人が住めるが、傾斜の急なところは厳しい。

そのため黄泉和の交通網は城下町にしか張りめぐらされておらず、それも王城から隣国へ続く線路がひとつふたつ、ひかれているだけでしかない。

だが、黄泉和自体は、なかなか活気のある国である。

城下町もルザ村も賑やかだし、王家の人間は社交的だし。

もともと、謎は多いのだが。

調べれば調べるほど歴史は黒く深くなっていく、それが黄泉和であった。

そんな場所の、とある峠。

一人の少女が、手ぶらで歩いていた。

前を向いているが焦点はあっていない。

ただ機械的に足を動かしているだけのようである。

しばらく歩いたところに、小屋を見つけた。

鍵がかかっていて中へは入れないが、その様子は半開きの窓からでもうかがえた。

人が住んでいた形跡がある。

「……つつくんが第八部隊の人たちと住んでたっていう家って・

・
これじゃないよね？」

無表情で、つぶやく少女。

彼女の名はなち。

月夜霊率いる第十部隊の副隊長である。

外見は10歳くらいの幼い少女だが、なかなか腕の良い術師である。腕、といえば彼女の右腕は鉄色をしている。

月夜霊が硬化させた特殊金属でつくられた義手である。

どのような経緯で片腕を失ったのかは、誰にもわからない。

本人の記憶にさえ、それは刻まれていないのだから。

もともとなかったのだという説も、中にはある。

しばらく窓からのぞいたあと、なちは入り口を破壊しようと試みた。肌色をした左手をかざす。

だが、その肩を後ろからつかまれた。

驚いて振り返るなち。

そして、目を見開いた。

*

同時刻、第五部隊。

「こんなの届いてましたあ〜」

鴻ときに向かって封筒を放り投げるは、ルノ。

「何ですか、これ？」

「さあ？」

ピコと話していたときと態度が異なるが、それはいつもの光景だ。

鴻とルノは同い年だが、ルノの方が僅かに背が高い。

といってもルノは極めて平均的であって、鴻が1歳分ほど低いのである。

童顔のせいかわ、3歳若く見られることが多い鴻を、ルノはつい最近まで年下だと思いついていた。

だから、自分の所属する隊のトップであるうが、お構いなしなのである。

「あー・・・僕ちよつと出てきますね」

「あーはいわかりました」

興味を示さぬまま、ルノは自室に入りドアを閉めた。

身支度をすませ、でようとしたとき、ピコに呼び止められた。

「どこいくんだ？」

「・・・調べに」

手にもっていた封筒をこっそりと隠す。

不審がらないピコをみて、鴻はホッとする。

「俺もついていく。」

「大丈夫です 僕ひとりです」

「誰もお前の心配なんかしてないけど？」

「ほら、いかないのか？」

ピコが鴻の横を通り過ぎて表へでて、立ち止まったまま動かない
鴻。

怪訝な表情にピコはなる。

「ピコって僕のこと信用してないですよね・・・いろいろと」

「何、いきなり？」

うつむきぎみの鴻に近づく。

すると、それとすれ違うように鴻は歩き始めた。

ピコはしばらく考えてから、追いかけることにした。

「行かないで」

だが、とめられた。

「強いつて認めてるなら行かなくてもいいじゃないですか」

いつの間にか部屋からでてきていたルノだ。

「いやだから、俺はあいつの心配なんかしてないんだって」

「じゃあ、何しにいくんですか？」

いつも以上に真剣なまなざし。

「・・・お前、何か知ってるのか、ルノ？」

「何をですか？」

普段ならきよとんとなるところ、それを表情ひとつ変えずにききか
えしてくるとは。

やはり、なにか裏があるのだろうか。

「私はただあ……ピコ様を危険な目にあわせたくないだけで」

「何が危険なんだ？」

「へ？」

「俺、鴻から行先告げられてないからわかんねーよ、危険かどうかとか。」

てか、何でお前は危険だってわかるんだよ？」

「……あの人と行動したらいつも危険にまきこまれるからでもその危険を、あいつは自身の力だけで乗り越えてきている。」

先ほど、信用していかないのかと問われたが

それは向こうも同じだとは思う。

まったくもって頼ってこない。自分だけでなんとかしようとする。

失敗したことがないから何とも言えないけど、もう少し信頼してくれても悪い気はしないだろう？

俺はそう思うわけだが、ルノは拒否してるな……。何故だ？

「ていうか……見失っちゃまったじゃねーか、さっそく。」

どうしてくれんだよ？」

「……今見失わなくても、すぐはぐれるくせに。」

「迷子になりやすいんだよな、うちの隊長は

じゃあ俺、いくから

ったくどっちいったんだ〜?!」

走っていく後姿を目で追う。

見えなくなるまで、追い続けて。

06・主女

「そんなところで何してるのん？」

肩に触れた相手は、意外にも笑顔だった。

親しい相手ではない。

話したことすらなかったような気もするが・・・

この人の顔を、知らないはずがない。

なちは息をのんだ。

「泥棒でもしようとしてたの？」

にこにここと問いかけてくるのが、逆に怖い。

「仮にそうだとしたら？」

相手をねめつける。

だが、やはり余裕そうである。

なちの警戒は、さらに深まる。

「ここはあなたの国じゃないから 好き勝手することはできないよ？」

・・・レイラさん

「証拠がないから？」

余裕そうな相手、レイラが腕をくむ。

自分は相手のことを知っている。

それだけの知名度を誇る人だから。

けれど、相手が自分をしっているという確証はない。

私は彼女の国の者ではないし、各部隊の副隊長の知名度は

それほど高くもないのだから。

隊長十六人の名前と顔がすべて一致する人は結構多いらしいが、

私たちは所詮、この程度。

知らなくて、当たり前。

「あなた、第十部隊のなちちゃんでしょ？」

あーなんかいいにくいから、なっちでいい？」

「・・・知ってるの」

「え？何で？月夜霊の取り巻きって言って、結構噂になってる」
遠慮せずそんなことを言うなんて

「・・・さすがといったところかな
取り巻きって・・・」

自分はただの部下なんだけど。

「でさつ、本当のところ、どうなの？」

なつちて月夜霊の味方？ってなると、犯罪者だったり？」

「・・・私はあの人とは違う」

「そうなの？」

そう、違う。

確かに彼は様々な罪を・・・過ちを犯してきた

けれど、一概に犯罪者と形容するのはどうかと思う。

これでも一応、彼を隊長として信頼しているのだから。

それに比べて自分は

自分の利益のためだけに行動している。

だから、私は悪なのかもしれない。

「あなたからみれば世の中ってくだらないものなんですよ？」

「え？」

どうやら自覚がないらしい。

「どうしてあんな奴の下についてるの？」

ミクルラムの頂点に君臨するあなたが」

レイラという名をきけば誰もが頭にうかべる事実。

彼女は、ミクルラム王国の女王様。

「んっ・・・好きだから？かなあ？」

・・・っていつても、友達的な意味でだけどね」

「単純だね」

「うん。でも、一時期恋愛的な意味で好きだったよ。ふられちゃっ
たけどね」

・・・え。

「あははっ 今となっては良い思い出だよ。」

「彼は私の命の恩人だから」

その笑顔には、無理があつた。
きっぱり諦めたんだ・・・？

命の恩人・・・

・・・そういえば数年前に一度、ミクルラムの城が全焼した
んだつたつて。

それで、王も女王も・・・この人にとっては、両親か。

・・・亡くなつたつて話。

あれはまあ、ひどい事件だつたけど。

奇跡的に二人の後継者は助かつて・・・。

もしかして、それに零が関係していたのか？

そうだよねえ・・・。

王女レイラと王子レイジが共に第八部隊に在籍しているの、おかし
いとおもつてたんだ。

・・・あ、れ？王子といえばもう一人・・・？

「なつちは？月夜霊のこと好きなの？」

突然話を振られて、あせつた。

考え事してたでしょ〜と、にやつくレイラ。

「友達のな・・・意味で？」

「そつかあ！」

今、すつごく嬉しそうな顔をした？

「やつぱ恋愛的に好きになるには、年齢差があるかな？」

私、こうみえて月夜霊と同じ年なんだよお？」

・・・私の実年齢を知っているのか？

何故か容姿は八つするときから変わらないけど。

というより、それ以前の記憶がない。

そこから彼に救われた四年前までの記憶も・・・

「あれ、もしかして知らなかったとか？」

私がいえたことではないけど

レイラつて、実年齢より幼く見える。

勿論王女の年齢くらい、把握していたけれど。

それにしても・・・

何考えてるのかわからない人だな。

「そんなことないよねえ！」

あつ、ねえ、ちよつと時間ある？あるでしょ？

ちよつと付き合つてよ〜」

「え？」

「アルウエドに行こうとしたらなつちを見かけたから

つい尾行しちゃったけど、どうせだから一緒にアルウエド行こう

よ？」

・・・尾行だと？

私がこのあたりを調べまくってたの・・・ずっとついてきてたの？

忍び込もうとしたから・・・偶然を装つてとめたの？

「あたし〜、なつちと一度、話してみたかったんだよねえ」

なちの腕を引つ張り、歩き出すレイラ。

無理やり振りほどいてから、ついていくことにした。

07・家族

「おかえりー……って、あれ、ティル?!」
第八部隊の扉がひらいた。

隊長たちが帰ってきたのかと思った。

だが、入ってきたのは不思議な帽子をかぶった少年だった。

「どうしたの?」

ハフスキーパー
非戦闘員のナーレが出迎える。

そのほかの者たちは、横目でにらんでから、行っていたカードゲームやら修行やらを続けた。

「……隊長に相談したいことがありました」

「あゝ、今いないわよ?そうね……しばらく待ってみる?

お茶、もってくるわね。」

少年は端の机に座った。

誰も、彼の相手をしようとはしない。

しばらくしてお茶をもってきたナーレが、向かい側に座る。

「あなた、幹部昇進 断ったって?」

うつむいていた少年が、顔をあげる。

それを、ナーレがのぞきこんでいる。

「この間はさすがに人手不足だったからね……。」

新しく幹部にするなら、あなたかフィリアかって話になったのよ。
でも、二人ともに断られて……うちの隊、本当に大丈夫かしら?」

ナーレの独り言を、少年は聞き流す。

責任をおしつけられても、困るのだから。

幹部になりたいって思う隊員はいくらでもいるんだし……
自分でなくてもいいんじゃないか。

「あなたは何で嫌だったの?ティル」

「……自分には無理です」

「どうして？強いのに。」

「・・・強くないですよ」

真剣なナーレと目を合わせるの、つらかった。

だからついつい、視線をそらしてしまう。

それでもナーレは追ってくる。

「もう少し自信もつてみたら？」

この私がここにいるんだから、あなただって大丈夫なはずよ？」

「ナーレさんって本当は強いんでしょ？」

「まさか」

攻撃する術も、治療する術も 両方兼ね備えているはずなのに

何故か彼女は非戦闘員。

普段はこの拠点・・・というか、家？のメイドだし

闘いとかになっても、治療してるだけで、たたかわない。

それがいつも不思議でならない。

「あの・・・隊長はどのくらいしたら戻ってこられるんですか？」

「かたい敬語はよしなさい？」

そうね、とま鴻くんのところに行ったただけだから、すぐ戻ってくるは

ずなんだけどね。

ん〜、でも、姉弟バトルが始まってるのかも考えられるかも・・・

「・・・」

勝手に妄想して、にやけるナーレ。

「ナーレさんは何故、幹部になろうと思ったんですか？」

その妄想を打ち砕かれ、我にかえる。

何で・・・ うーん、何でだろう？

思い出してみる。

始まりは・・・ 四年ほど前、つまり

妖狩りが始まる数か月前、だったかしら。

隊長と出会って、それから幹部になってほしいっていわれたの、ほ

んの数日後だったなあ。

何で承諾したって、そりゃ、名誉なことだと思っただし

治療も得意だから、みんなを支えてあげたいなって。

「数日後って・・・ある程度信頼できる人だったら誰でも幹部にしちゃうんですか？」

「ええ？そうとも限らないと思うわよ？まあうちはアットホームな隊だしね・・・」

隊長なら全員の顔と名前覚えてるはずだし

そんな簡単に誘ってたら今の人数じゃないわよ。」

「・・・そうですね 少ない方なんでしょうか？」

「ん〜 結構ふつうだと思っわよ？」

あの第一部隊でさえ五人なんだから。」

「五人？四人じゃなくて？」

「え？」

どちらとも、嘘をついている顔ではない。

お互いに不思議がる。

「四人だから四天王ってよばれるんですよね？」

「え・・・ああ、その四人にくわえて、私みたいな役職の人がいるのよ〜」

「あ、そうなんですか」

「最も・・・その人は半端じゃなく強いけどねえ。

私とは違って」

ただの謙譲ではない。

ナーレの表情をみて、ティルは確信した。

「まあ、あなたの気持ちもわからなくはないのね。

うちにきたの、妖狩りの直後だったし。」

「はあ」

「うちの幹部ってみんな古株でしょ？新しくレイラとレイジの三年前。」

ってなると、ティルって彼らよりはやいわね。」

黙ってうなずく。

「最近も隊員増えてたり増えてなかったりするんだけどね〜」

やっぱ、妖狩り前後はひどかったなあ。いろいろと。

だって彼、まだ十二だったのよ？そのとき。

鴻くんやロセちゃんやまつりちゃんは、その二つ下だし。

ユラちゃんは・・・わからないけど。」

「その年の判断力でこの隊を立ち上げたというんですか？」

「立ち上げたのは実質もつと前。でも、今の・・・この、家みたいな空間になったのは

そのときだったのかな。それ以前はただの孤児院って感じだったわ〜。」

「・・・ナーレさんも？」

「ん？ああ、両親？私は・・・うん。物心つく前に・・・ね。」
表情ひとつかえないティル。

それに、悲しそうな顔を見せるナーレ。

そんな神妙な空気をよそに、ほかの幹部たちは反対側の机でもりあがっている。

それを指さす。

「あれを見て。すっごく楽しそう。」

みんな、何年も前からあんな感じだった。」

「そうですね」

興味なさげに指さす先に視線をやる。

此方がみていることには気づいていないようだ。

「ここにはね、身分の差なんてもの、存在しないのよ。」

私はただの村娘だったし、隊長も私と対して変わらない。

でも、あの中の二人はそれぞれの国の王子様。

ここにはいないけど、レイラだってそうでしょ？

それでも私たちは家族なの。」

視線を元に戻す。

ナーレは真剣な顔で、こちらの様子をうかがっていた。

「だから、気にしなくていいのよ。」

そういうのがあるから、拒んだんでしょ？幹部になること」

確かに・・・そうかもしれない。

それに、自分は四年前に死んでいるはずだった。

そんな自分が　こんな輪になって

「入れるわよ。だって、まつりちゃんだってあなたと同じ。」

それでも彼女はいま、第三部隊の頂点。」

まつり・・・か。

懐かしい響きだな・・・。

四年前、自分はただ逃げていた。

逃げて、逃げて　そして単純な方法で生き残った。

けれどあの人は、たたかった。

そして、どこその魔導師ソイサラーに殺されたんだって、風のうわさでながれ

てきた。

なのに生きていた。

知らない間に、第三部隊も復旧させてたし。

自分には到底理解できないな。

「隠してるつもりだろうけどね、みんな知ってるのよ？あなたのこ
と。」

「四年前のことも、それでどうやって生き残ったかってこともね。」

「っ」

一瞬だけ、取り乱してしまった。

まさか・・・ここにいる全員が？

「だから、ここでは隠す必要もないし

少しくらい弱くたって納得できる。」

大丈夫よ。だって隊長があなたを選んだんだもの。

ね、どう？幹部になってみたら？」

自分が・・・なってもいいのか？

自分なんか？

・・・というか、何故知ってるんだ・・・

まさか、零か？

あいつがいいふらしたのか？

もしくは……まじり？

あの時のことを知るのは、それくらいしか……
いないはずなのに。

08 半妖

四年前

妖狩り末期

森の奥、

四つの影が佇んでいた。

二つは長い耳と羽根をもち、一つは身体の半分を紅に染め
そして自分は、人間と妖虎の血を半分ずつ流した。

いわゆる、半妖。

ほかに魔導師ソーサラーと混ざったやつらがいたが、協力しあうことはなかつた。

「見つかるのも時間の問題だぞ……どうする？」

「僕は闘うよ」

「おい、お前がかなう相手じゃねーだろ？逃げろって」

「どうして？じゃあどうして兄さんは逃げないの？」

僕らと一緒にいたら殺されるだけだよ。

兄さん一人なら、なんとかなる。だって男の子だもん」

妖は皆殺し。半妖は男だけ生かし、妖の血が四分の一以下なら殺さない。

妖狩りにはそんなルールがあった。

半妖は男なら、大した子孫をのこせない。

後世にこの戦を知らしめるためなのか、面倒くさいだけなのか……
細かい理由はわからなかったが。

だが、ほとんどが女をかばって死んでいった。

「なら俺はお前と一緒にたたかかってやる。」

俺、お前ら三人をまもるよ。」

「兄さん……」

その兄妹は、どこぞの戦闘種族との半妖。
妹の名を、まつりといった。
可愛かった。

「・・・きたか」

木々のむこうに、かすかな殺気。

「向かい討つ！」

まつりがそういった。

そして、振り向く。

「逃げていいよ、二人は」

その言葉の意味がわからなかった。

「僕たちでなんとかするから、逃げていいよ」

何故？

「ほら、逃げろって。二人ともか弱い女の子なんだからさ

逃げないとまずいって。」

「兄さんそれちよつとひどい」

隣の少女と目を見合わず。

彼女は静かにうなずき、反対方向に走り出した。

それに、自分もついていくことにした。

だが、森を抜けるころには、はぐれていた。

市街地にでていた自分は、人目を気にしながら歩いていた。

そして危うく見つかりそうになる。

投げられたライフをかまし、物陰に隠れる。

しばらくして刺客がさったあと、自分はその地面に転がったナイフ

を手に取った。

ここで命をたつのは簡単だが、それではまつりたちに悪い。

咄嗟に思いついたのは、髪をきることだった。

髪をきって、性別を偽れば、戦火を逃れられるかもしれない。

「貴様・・・半妖か？」

「なんだ、男か なら良い」

結果は予想通りだった。
物陰からであろうとした瞬間に魔導師ソーサラーと出くわしたが、
そいつは自分を男だと誤認した。
これなら、いける。
女さえすてれば、いいんだ。
これで、まつりたちの援護に行こう。
そう決意した。

それが、テイル。
いまでも見た目は少年だが
性別は、女。

戻った森に、まつりたちの姿はなかった。
かわりに、いくつもの血痕がのこっていた。
無駄に・・・カラフルだけど
まつりたちのは何色だっけ・・・？
人間と同じ赤ヒトでいいのか・・・な。
足元にある赤色を見ながら、考える。
逃げたんだよな・・・ しんでないよな。
死ぬわけないだろ、あいつらが。
そうして自分を落ち着かせ、森を後にした。

そして数か月後、テイルはまつりの死報を聞くこととなる。

*

現在

「あら、隊長おかえり」

数十分後、零とユラが戻ってきた。

「あ・・・ティル」

いち早くティルの存在に気付いた零。

ティルは頭をさげる。

「何かあった？」

「あ、はい 隊長に・・・お話が」

「あーんー」

ちよつとさきにシャワーあびてきていいか？」

「え、あ、はい」

ユラを残し、零は奥へと入っていく。

その姿がみえなくなつてから、ユラが苦笑いを浮かべた。

「帰ってくる途中、ロセさんに出くわしまして・・・いろいろと。」

「ああ、なるほどね」

ナーレが微笑む。

ティルは無表情。

「ロセちゃんつて会うたびに疲れるわよね」

「はい・・・」

その後しばらく、ナーレとユラとの会話が続いた。

ティルはそれを、黙ってきいていた。

何かを考えながら。

第三部隊

「えーっと、それで第三部隊に入ったとして、どんな活躍をしてくれるのかな？」

まつりがいつも以上ににこにこしている。

まわりにいる幹部たちは見て見ぬふりをしている。

「えっと・・・私にできる限りのことは、なんでもします！」

目の前の少女は、いつになく真剣だった。

まつりの口元がゆるむ。

「なら、入ってくれてもいいよ。今の君の実力じゃ、当分幹部にはなれなそうだけど」

「あっ・・・それは、別に構いません！頑張りますから！」

多少残念そうな顔をしたのを、まつりは見逃さなかった。

だが、それに反応することはない。

ただ、笑顔を保ち続けている。

しばらくの沈黙をやぶったのは、少女のほうだった。

「あの、こんなときいていいのかわからないんですけど、

お姉さん、あつ、いやつ、まつりさんは・・・人間ヒトじゃ、ないんですよね？」

恐る恐るまつりの顔をのぞきこむが、その表情に変化はない。

わかって当然、そんな視線をおくっていた。

それもそのはず、目元の痣や耳の形が、明らかに人間のそれじゃないのだ。

「・・・まさか、半妖・・・ですか」

声がさらに震える。

まつりの笑みが、逆にこわい。

「とりあえず、隊長って呼ぼうか？」

まつりから発せられた言葉に、啞然とする少女。

「えっと、まあ、何、僕が人間じゃなかったとして、

君はどうするつもりなの？」

反論できない。

妖狩りから四年、たとえ目の前にいるのが妖だとしても、狩るわけにはいかないし

まずその前に戦って勝てる気がしない。

誰かに知らせたところで、信じてもらえるかどうか。

それに、私はそんなことをするためにここへきたわけじゃない……。

「ど、どうやって……生き延びたのかなあって」

「戦ったの」

「え？」

「……たたかった？」

「敵をすべて倒せば、生きのこれるのは自分なの

……最も、世間はこういうけど」

静かな声で、まつりはいった。

「まつりは四年前に死んだってね」

*

アルヴェド＝アリオン

「それで、話って何」

先ほどからそわそわしているのは、なち。

その向かい側では、レイラがくつろいでいる。

「なっちはさ、この村でおきてる傷害事件の話、知ってる？」

なちは口を動かさず、ただレイラをねめまわす。

「赤い眼をした少年といったら？」

「アウエル」

即答。

「あー．．．そういえば、そうだよね」

予想していたのとは違う返答で、一瞬戸惑ってしまった。

だが．．．

確かにアウエル、彼の目も赤かった。

怪訝な顔をするなち。

「あ、じゃあ、その少年の横に、白い髪の少年がいたとしたら？」

「．．．．何がしたいの」

「うん、ちよつとききたいだけなんだけど」

「．．．．零とアウエル もしくは．．．．」

「零．．．．か。そう思うんだ？」

「なんで」

気まずい会話である。

何故第五部隊の名がでてこないのだろう。

単刀直入にきいてみようか。いや、

これ以上追及すると、さすがに感づかれてしまいそうだ。

「．．．容姿なんて簡単にかえられると思うけどね」

「．．．え？」

迷っている、なちの言葉が耳に届いた。

「世界はあなたが思ってるよりもずっと広いんだよ、王女様？」

容姿なんて、しょせん建前なの。

自分の望むようにかえる術が、この世には存在するの。」

何をいつているのか、理解しがたい。

だが、レイラは真剣にきいてみた。

なちの視線が鋭い。

「最低でも、私ならできる。月夜霊に扮して街を暴れまわることも、

あなたに扮して王朝をつぶすことも、できるの。

「．．．．そのこと、忘れないで」

そういつて、なちは立ち上がった。

立ち上がったも、たいしてない身長。

可愛い容姿とは裏腹に、真つ黒な笑みを浮かべて、彼女は歩き去った。

ひとり取り残された空間。

ポジティブなレイラは、気にせず立ち上がり、一人、きたのとは反対側の道を行った。

10・貴族

ティルは、零としばらく話をしたのち、第八部隊本部をあとにした。幹部になる件については

「もう少し考える時間をください」だそうだ。

背中がみえなくなるまで ナーレは見送り、その後 扉をしめた。

「ティルは今のままでも十分強いけど 意志があればもっとのびるわ」

誰にいうわけでもなく、そうつぶやいて 彼女は自室へと戻っていた。

アロールナ北部には、三つの城がある。

その二つは、森のなかにたたずむ古城。

森をぬけると、城下町がみえてくる。

その中心部にみえるのが、アロールナの王城である。

町を一人歩く少女、名をロセ・フィンス。

フィンス家の一人娘だが その名家を知らない者は 国内にはいないだろう。

アロールナ東部に、彼女の煌びやかな城はたっている。

最も、現在は使われていないのだが。

要するに彼女は貴族の人間であり 彼女はたびたび王家のパーティーなどに招待されていた。

だから彼女にとって、王城など珍しい場所でも神聖な場所でもない。ドレスを着れば、皆が振り向く。

だから軽装で かといって変装はせずに 町をあるいていた。

それでも、気付く者には気づかれる。

彼女は 気付かれてもなお 一般人としてあつかわれることを望んだ。

だから 彼女は国のため 人類のため たたかうと決めた。
そして時は今に至るわけだが

「あつづく・・・ 何この天気 ふざけてるわコレ」

独り言をもらしながら歩くその振る舞いは、貴族のものとは到底思えない。

「第五部隊に月夜霊の拠点を探すよう依頼されたわけだけど、何でうち一人なわけ？みんな何がそんな忙しいわけ？本当ツめんどくさいわあ」

「いま なんて？」

その独り言は 独り言ではなくなってしまったようだ。

見知らぬ人にきかれていた。

「だれ？」

それは、山羊のような耳のついたフードをかぶった、性別や年齢がうかがえない人だった。

「ただの通りすがりです それより いまさつき、月夜霊 って

いいましたよね」

「あ、はあ ご存じで？」

ただの通りすがりにしては服装が奇妙すぎる。

ロセは相手をねめまわす。

「これ ですよね」

そういつて 性別がわからないのでなんともいえないが、仮に彼と称しておく

彼は懐から一枚の紙をとりだした。

それは、月夜霊の手配書だった。生死問わずとかかれている。

こいつ、もしかして懸賞金目的で月夜霊を探してる？

「ですが 我々の目的は懸賞金ではありません」

我々だと？

「我々がもとめるのは そう 月夜霊、彼自身です」

何？

一瞬 感情が顔にでてしまったと、後悔する。

”通りすがり”はほくそ笑む。

「協力していただけませんか？」

「断る」

即答。

「何故？まだ報酬も何もいつてないのに」

「だが断る」

さらに即答。

彼自身をもとめる理由なんて、限られてる。

月夜霊といえ、世界でも有数な夢幻術師。

彼はその膨大な魔力を、普段あまり使わないらしい。

つまり、温存してあるのだ。

だからそれを手に入れることができれば、世界を変えられるのではないか

一時期そういつた話でもちきりになったが、やはり いたのか
未だそのような組織が

月夜霊を渡すわけにはいかない。

あの方は、賞金首つぐよみがつかまることを望んではいない。だから！

「それより教えてもらいたいんだけど、”我々”って 一体なんの組織なの？」

「ほう、勘がいいようですね」

彼がはなった”気”に圧倒されるロセ、唾をのむ。

「頂点に君臨するは、すべての人類の長と成るべき最強の戦士

その右腕には世界を創る糧となる最強の術師

そして我々は、そのもとに集う神聖なる戦士および術師だ」

こいつ まさか、世界の創造主を名乗る、あの・・・

「あなたが第二部隊隊長であることは心得てますよ、ロセ・フィン
ス嬢」

なっ・・・！

やはりこいつ、うちのこと知って近づいた！

つまりこいつは”ただの通りすがり”でもなんでもなくて

「協力していただけないのなら」

次に懐からとりだされたのは、二丁の拳銃。

そのうち右手に握ったほうの銃口を、ロセにむける。

「この第一部隊四天王がエレメンタル一員 大地ノームのルキが

あなたを殺めるまで」

11・幻術

第八部隊

「雲行きが怪しいですね……」

ユラが窓から空を眺める。

そして ふと、何かを思いついたかのように建物の外へと出ていく。それを黙ってみている零もまた、異変に気づいていた。

なにか、嫌な予感がする。

外から、気配を感じる。

ユラがでていったのも、そのせいだろう。

確かに今にも雨が降りそうな天気だが、それとは関係のない、別の何かがあつて彼女は外へでたのだ。

そう、零は確信する。確信し、立ち上がる。

零がユラがでていった扉を再びあけるのを、周りでトランプをしていた幹部たちが見て、いろんなことをつぶやいた。

*

あのレイラという王女、気に入らない。

建物の裏で、なちは思う。

一般人をきどつてる。

そしてそのレイラが所属する第八部隊も、気に入らない。いや、違う。

気に入らないなんて、可愛らしい言葉は、的確ではない。この感情は、憎い。そうだ、憎んだ。

第八部隊が……ユラが！

「……お前だったのか

最近俺たちをかぎまわしてるってのは」

「?!」

ふりむくと、そこには建物の持ち主がたっていた。

「零……」

ばれた……

唇をかみしめる。

なちは、レイラとわかれたあと、第八部隊 アジト 本拠地に直行していた。

「何の用だ？」

しばらく考えたあと、なちは左手を差し出した。

零の顔を狙っているが、身長差のため直接は届いていない。

「俺を殺す気か？」

焦る様子を見せない零をねめまわし、考える。

……今こいつを先に殺してしまうのは簡単だけど

……厄介なことになりそうだよねえ……

……しかたがない。

予定よりはやいが、今はこうするしかない。

なちは両手をひろげた。

「破壊しにきたの」

そしてその手に、黒い炎をまとう。

すると刹那、建物が闇につつまれてしまった。

「すんげ……」

「感激してる場合かな？」

大丈夫、すぐに壊してあげるから」

「……何が目的なんだ？俺たちの拠点を破壊して、何の得になる？」

10歳くらいにしか見えない少女を前に、零はどうすることもできない。

「……零ってさ、体術は強いらしいけど

魔術は人並みなんですよ？知ってるよ。」

そっぴいながら、零に歩みよるなち。

黒き炎をまとった右手を、零につきだす。

「私なんかに殺されるのはやっぱり屈辱かな？」

「……」

「でも仕方ないよね、あなたの弱点を私が見抜いちゃったんだから薄笑いをうかべながら話すなち。」

だが、零が表情を変えないのを見て、その余裕さは少しずつ薄れていくこととなる。

「……恐怖で言葉もでない？」

「……必要ないからだ」

「ん……？」

少し間をあけて、零が口をひらいた。

「魔術の才がなくても、俺には相棒パートナーがいる」

次の瞬間、建物を覆っていた黒い影が消えた。

勿論、なちの手の炎も。

驚き、ふりかえるなち。

「……ユ……ラ?!」

そこには、此方へ近づいてくるユラの姿が。

かすかに光をおびている。

「まさか……光の幻術で?! そんなバカな……」

私の幻術は……完璧なはず……だよ

今まで負けたことないんだよ?!」

幻の術と書くのは、今まで夢の産物だと思われていたからであって現代、それは現実となつて存在している。

それは、数年前の争いの際に発見された、一部の人間ヒト・魔導師ソーサラーがもつ特殊な能力。

「……幻術じゃないですよ」

静かな声で、ユラがいう。

なちの目が見開かれる。

「ま……さか 夢幻……術?!」

夢幻術。

見た目は幻術と大して変わらないが、攻撃力は明らかに低い。

だがその分、何等かの特殊能力を兼ね備えている。

当初は幻術と同じものとされていたのだが、あまりに攻撃に向かないので、分類されてしまった。

わけたはいいが、幻術の使い手は世界に数えられる程度にしか存在しない。

更に、夢幻術師のもつ魔力は、普通の攻撃系幻術に使うことができれば、膨大な威力を発揮する。

そのため、夢幻術師のもつ魔力はとても狙われやすく、術師たちはそれを避けるため基本的に自分の能力を隠した。

だから、滅多に見れるものではないのだが……。

「そう。私の夢幻術は、闇を晴らす光。

……どんな闇でも相殺できる。」

「……相性最悪ってわけか」

更に強く、唇をかみしめた。

「……で、何が目的だったんだよ」

「……何も無い。ただ第八部隊きみたちが嫌いだからだよ！」

「……月夜霊とは無関係なの？」

ユラがきく。

舌打ちする、なち。

「関係あるわけないじゃん。」

苛立ちが顔にでてている。

「……関係ないのに……」

破壊を続けるあなたの責任を……彼はかぶってる……」

「フッ」

うつむくユラを、なちは嘲笑した。

「何のこと？」

「……わからないの？」

あの人の懸賞金が最近妙にあがってきてるでしょ？

あなたが色々なモノを破壊したからよ。世間は月夜霊の仕業だつて言ってるけど、私には信じられなかった。

でも・・・今回の件で確信したの。あなたがやったんだって。
この建物につけられた傷・・・同じだもの。」

それをきいて、零は建物を見る。

そこには、何かで切り裂かれたよう跡がいくつものこっていた。
先ほどなちの術に覆われたからであろう。

だがこの傷・・・見覚えがある。

「・・・何とも思わないの?!月夜霊は・・・

あなたの・・・あなたの命の恩人なんでしょう?!

そんな彼があなたのこと信賴して」

「黙れ!!!!・・・お前に何がわかるんだよ・・・

私の両親を殺したお前に!!!!!!」

その叫び声で、零は傷跡について思い出すのをやめた。

「・・・

・・・え?」

呆然とするユラ。

「とぼけないでよね・・・詳しく教えてもらったんだから」

・・・

・・・まったく心当たりがない。

ユラの額から、冷や汗がたれる。

「嘘・・・だろ?」

零にとつても、衝撃的だった。

目が泳ぎ、一瞬、建物が見えた。

その傷跡が、再度目に留まった。

「あれ、これ・・・って・・・

思い出す。先ほど考えていたことを。

「お、おい・・・

まさかピコに成りすましてアルヴェドを荒らしてたのも・・・お
前か?」

「ピコ・・・?何それ?」

「この傷・・・お前の術だろ?」

最近騒がれてる傷害事件にのこされてたのも・・・これだ」
怪訝な顔をする、なち。

「目撃者は赤い目をした男だって言ってるんだ

・・・お前が幻術で成りすましたんじゃないのか？」

「・・・意味わかんない。第一、ピコって誰？」

「え？」

なちよりさらに、ユラが不思議がった。

「ピコのこと知らないの？」

「は？」

ユラをにらみつけるなち。

「どうやら、本当に知らないようだ。

「・・・どうして、私のこと調べたのに私の弟の名も知らないの？」

「・・・そんなこときいてないし」

ユラの顔が更に真剣になる。

「あなたがきいた情報、きつとデマよ・・・。」

「どうしてそうなの？」

「誰からきいたの？私があなたの両親を殺したって」

「・・・。」

黙りこむなち。

「第一、あなたに”両親は殺されたんだ”っていう記憶、ないでしょ？」

月夜霊に拾われたとき、あなたに記憶は一切なかった」

「・・・。」

うつむく。

それが否定できない、事実だから。

「普通、気にすると思うな・・・。」

自分の大切な人を殺した人も、その家族も、嫌いになるよ。

でも・・・ピコのこと話さなかった情報屋って・・・

いったい何者なの？」

「情報屋？・・・私、別に情報屋にきいたんじゃないし」

「・・・え」

「第一部隊の人だよ

・・・伍くみつていう」

ありえないありえないありえない。

伍が動くみいているなんて、そんなことありえない！

第八部隊が妙に騒がしい。

広間でなちが休んでいる。

何か考え事をしているようだ。

ユラと零は資料室でイライラしていた。

「どうして伍が？あの人は現役を引退したんじゃ」

「引退したというか、最近闘うことを避けてるだけで、治療師としての活動は続けてる」

「伍が動きだしたということとは、第一部隊が何か仕掛けてくるってことですよね？だとすれば、目的は…」

「…月夜霊じゃないか？」

「…そんな」

うつむくユラ。

気まぜい雰囲気。

零も次の言葉をためらい、沈黙が流れる。

お互い、なにを話すべきなのかわからない。

そのとき、突如扉がひらいた。

無表情でたっているなちの姿がそこにある。

「どうしたの？」

なちが震えだす。

そして、無表情のまま 目から液体がこぼれおちた。

そっと近づき抱きしめるユラ。

「お前、月夜霊のこと、何か知ってるんだな？」

しばらく様子をつかがってから、零が言葉を発した。

涙をふいてから、うなずくなち。

「私、無我夢中だった。彼のこと、なにも考えてなかった。あんた

の言つとおり、命の恩人なのに。何もしてあげれない。でも、なち、知ってるんだ。第一部隊が欲してるのは月夜霊の力。世界最強の夢術師の膨大な魔力。」

「やっぱりな……」

「でも、どうしたらいい？彼をまもるためには、どうしたらいい？私には何もできない……。なちは月夜霊とは違って、自分のことしか考えてなくて……人を傷つけてばかりの悪人だから、他人のために自分を犠牲にできる彼の気持ちなんて、わからないし……どうしたらいい？」

「なち……」

ユラの暖かい声が響く。

「あなた、よく知ってるのね。月夜霊のこと。」

「……」

「彼の優しさを知ってる。私、一番弟子として凄く嬉しいの。だから、私、協力するよ。私だって、まもりたい気持ちは一緒だから。第一部隊が何を企んでいようが、私のお師匠様は誰にも渡さない。」深く抱擁する二人。

その様子をまじまじと見つめる零。

ユラの背にまわされた腕をみて、たずねる。

「前から思ってたけど、お前それ、義手なんだよな」

「え？ああ、うん。なちには右手が存在した記憶がなくて……。昔は、つくくんの夢術でつくつくてくれてただけど、そんな迷惑かけれないし、最近彼弱ってるし、今は自分の幻術でどうにかしてる。それでも、闘いやすいようにつて、コーティングしてくれるんだ。」

「……弱ってる？」

「そりゃ、ずっといろんな人から逃げまわってるんだから、弱るよ。第十部隊には治療師がないから……。」

「大変じゃないですか、それ。いち早くみつけてナーレにでも治療させないと。」

「っていうか、部隊に治療師がないとかもつとはやく言えよなあ。」

「お前は大丈夫なのか？」

「……」

急に無言になるなち。

零とユラを交互にみる。

「どうして、そんなに優しくしてくれるの？ なちって、部外者だし、此処、燃やそうとしてたのに……」

うつむく。

なんだ、そんなことかといった表情を見せ、

「そんなこと思わないで。傷ついてる人を放っておくなんてこと、うちはしないよ。それが第八部隊のポリシーってやつだから。ね、隊長？」

「んー、まあ、そうだな」

ユラと零は微笑んだ。

「ねえ、なちは月夜霊がいまどこにいるのか知らないの？」

「さあ……」

「そっか……。心当たりは？ ないの？」

「どこかの拠点……っていうか、隠れ家にいるかなって思ってた。それで、ルザ村の北西の山にもいってみたけど、いなかった」

「ルザ村の……」

昔、四人で暮らした家のある場所。

第五部隊からの情報で、既にそこに拠点があるということとはわかってた。

「なちも月夜霊を探していたのか……。いったい何をやってるんだ、あいつは。」

零は、月夜霊の行動パターンが昔から不可解であったことを思い出す。

「いつからいないんだ？」

「三カ月前に一度、本部に帰ってきて、それでまたどっかいつちゃった。いつになったらなちも連れて行ってくれるんだろう」

「そういうなちは、とても寂しそうだっただ。」

「あ、ところでなち、お前、アロールナの城下町出身なんだってな？」

「え…？ああ、よくわかんない。記憶がすごく曖昧で…五年以上前のことはほとんど覚えてないから」

何故なちの記憶は月夜霊に拾われたところで途切れているんだ？

それまで、彼女はひとりでどんな生活をしていたのだろうか？

零は考える。

ところで、第五部隊はどうやってこんな曖昧なやつ出身地なんて情報を入手したんだ？鴻の集める情報は信頼できる。だが、これに関しては…。…待てよ？

「なあ、お前は伍に騙されたわけだろ？」

「あ… えっと」

突然の話題転換に戸惑いをみせるなち。

「いや、せめてるわけじゃねーよ？それで、鴻は伍に協力してたりするのかなとか」

「えっ」

ユラが過剰に反応する。

「だって、月夜霊に関する資料ってほとんど第五部隊に調べていただいたものじゃないですか。それを疑ってしまったら終わりですよ？」

第五部隊に騙されてるなんて、信じたくないに決まってる。

ずっと友好関係を保ち続けている部隊なのに、疑うなんて、できない。したくない。

「そうだけど、絶対に正しいとは言い切れないだろ？」

「それは」

それでも、零の言葉は容赦ない。

なちにはよくわかっていないようで、呆然と二人の会話をきいている。

「伍が動いてしまったんだ。あの伍が。どんな手をつかってくるかわからない…！」

「でも、拠点はあつたじゃないですか。ルザ村北西。」

それは、まぎれもなく第五部隊からもらった事実。

実在することを確かめたレイラが連絡をよこしてくれたのだ。
なちもこれが事実であることに肯定する。

「ああ、もう、どこまでが正しいんだ！」

「隊長、自暴自棄になられては」

「そうはいったって、なにが正しくて何が嘘なのかわからないま、
勝手な行動は許されない。もしかしたら、第一部隊の罠かもしれないね
ーしな…。なにがってのは、わからねーけどよ。」

「そう、ですね…」

どうしてそんなに第五部隊を責めるの？まだ、第一部隊とグル
であると証明されたわけでもないのに。どちらかというところ、その可
能性はひくいじゃない。第五部隊ほど誠実な部隊はないのに。でも、
たしかにあそこにはつながりがある。どうあがいても否定できない
つながりが。

「まあ、ひとつだけ確かなことがあるよな。」

ユラはうなづく。

「伍と鴻が母子だということ、ですね」

13・大地

そのころ、アロールナの森の中では

「この第一部隊エレメンタル四天王が一員　大地ノームのルキが、あなたを殺めるまで
あなたを殺めるまで」

そう言うと同時に、ルキは引き金を引い・・・

引くことはできなかった。

ロセの足元から、鳶がのび、それがルキのもつ拳銃に器用にからみつき、

そして彼の手に巻きついた。

「何ですか、これは？ 鳶？」

凄い力で手を縛られているにも関わらず、余裕の笑みを浮かべているルキ。

それをみたロセの顔が、一瞬固まる。

「ほう： 妖がいなくなった今、あなたがた精霊術師は植物を操るといっわけだ」

穏やかな口調で語りかけるルキの目は、鋭い光を放っている。

ほんの少し、ロセは恐怖を感じていた。だが臆することはない。

「妖の血に反応し、その者と『契約』をかわすことによつて、妖のもつ特有の魔力と自らの魔力を貸し借りすることのできる精霊術師

…。人間やヒト魔導師ソイサラに存在しないほどの強大な魔力をもつ妖：いわゆる、精霊や妖精、妖魔などと契れば、どんな人間やヒト魔導師ソイサラよりも強

くなれる。そんな利点から注目されていた精霊術師：かつては恐れられていたといえど、妖が滅んだ現在、あなたがたはただの雑魚

に過ぎない。そう思っていたが：まさか植物までもを操れるとは。ということ、光合成もできるようになるのだろうか？」

つまらない冗談を交えるルキ。その表情は、やはり細い笑みのまま

だ。

「光合成には興味ねーな。ま、多くの精霊術師は体術をきたえるか、植物と戦うかって道を極めてるんだろーけどな。うちは、そういうのまったく気にしてない。ただ今、鳶が便利だと思っただから使っただけだ。」

「へえ、面白いですね」

「それで？ルキっていったっけ？あんたは、ただの拳銃使い？それとも、何かの力を使うの？」

「フツ…ただの拳銃使いで、大地ノームという二つ名を得るはずがないでしょう？もちろん、魔の才も優れていますよ？なんたって、我々は第一部隊。」

第一部隊。

自分たちが最強だって思いこんじゃって、本当に嫌い。

所詮、偶然「ー」っていう数字を得ただけの雑魚集団よ。

自分たちが世界の創造主だあ？笑止。

ロセはルキをねめまわす。

そんなロセを、まじまじと見つけているルキの口角は、若干あがっている。

なのに、目が笑っていない。

手には、やはり拳銃、そして鳶。

刹那

地面が揺れだした。

そして地中から大きな岩が現れ、ロセの鳶が切断される。

自由になったばかりの拳銃を、すぐさま相手の喉元にむけ発射するが、ロセの反射神経により、銃弾は彼女の横を通り過ぎていった。

舌打ちをするルキ。

そしてもう一度構え…

またもや鳶がからまった。

「しつこい女はモテませんよ？」

「しらねーな。うちには関係ねーし。」

ロセには、心に決めた相手がひとりいる。その人され振り向いてくれれば、ほかの男たちなんてどうでもいいのだ。

だから、肝心なのはモテる、モテないではない。

「フツ…なんだあ？まさか鳶しか操れるものがなかったのか？」
敢えて挑発する。

だが、ロセは動じない。

一攻一防が続き、まわりの地形が変形していく。

大地を揺らし、木々を倒し、と やっていること自体は自然破壊であるのだが、二人はたたかい終わるまでそれに気づきはしないだろう。

銃弾がロセの頬をかすり、鳶がルキの腕を斬る。

両方に擦り傷が増えていく。

突如、ルキの岩で体勢を崩したロセに向かって銃弾がはなたれ奇声が響き渡った。

崩れ落ちる。

「もし、大地の力だけでたたかっていたなら、相性的には優劣がなかったでしょうが… 生憎、こちらは拳銃も使う。あなたは言うてしまえば丸腰。それでは、わたしには勝てませんよ」

言葉を発するだけの体力はまだのこっちはいるが、ロセは口を閉ざしたままである。

「おかしいですね？あなたに関する資料には、あなたの武器は箒だとかかかれています。常備していて、おとぎ話にでてくる魔女のように空もとべる。今日は偶然持っていないかったのでしょうか？そうだとしたら、それが運の尽きだったんですね」

微笑を浮かべながら、ロセを見下ろしている。

ロセはうつむいているため、表情がうかがえない。

しばらく沈黙がながれてから、ルキが首をひねる。

「第二部隊隊長ともあるうお方が、このくらいで済みですか？まさかそんなこと、ありませんよね？」

「・・・ハッ」

一瞬にして空気が変わった。

まわりの木々が一斉に倒れる。

「お前程度に体力使いたくなくなつたんだがな…。仕方ねえ。」

ゆっくりと立ちあがるロセ。だいぶ出血している。

それをみて、ルキは口角をあげる。

「そこなくては。再開ですね？」

「望むところだ」

14・危惧

ロセとルキが戦っているのは別の、とある森のなか。

「やっと見つけた！なんだ、迷子か？鴻？」

ひとりで森のなかを歩いてきた鴻に、声がかげられた。聞きなれた声。

「ピコ・・・もしかして追いかけてきたんですか？」

若干息がきれている。

ずいぶんと探し回ってくれていたのだろう。

「まあな。だってお前、誰かに狙われてるっぽいし？」

「・・・」

目をそらす。

そんなことはわかってる、とでもいいたそうに、唇をかみしめる鴻。

「第一部隊の動きも怪しいけど、あいつらの狙いは多分月夜霊。

単純に力を手に入れたいのか、敵対戦力を消すためなのか、はつきりとした目的はわからないけど。

そのために周囲の人たちを利用しようとしてるんだろっな。」

「思ったんですけど、なんで最近になって月夜霊が注目されるようになったんですか？夢幻術師の力が膨大であることは、ずいぶんと前から知られています。」

「あれだろ、最近になってどっかのだれかが暴れ始めた、とか？」

「それなら心当たりがありますね。」

だが、ここでしばらくの間がうまれる。

何故なら、その心当たりは、二人の間では暗黙の了解であるからだ。敢えて口にしないのは、ピコがその名をきくことを拒むから。

そして、それなりの知名度と影響力のある夢幻術師といえば、まず一人しかいない。

つまり、言わなくともわかるから、わざわざ声に出さないのだ。

「で、鴻も同じように力をもってる。まあ、夢幻術師ではないし、幻術も使えないけどさ、遺伝ってやつがやっぱりあるんだろ。言っていないのかわかんねーけど、結構悪用してんだろ？お前の」「遺伝ですか」

言葉を遮る。それ以上は、ききたくない。表情に陰りがみえる。

「僕がもってる力なんて、夢幻術師とくらべれば微弱なものですよ。僕を狙うくらいなら、ユラとかのほうが・・・あっ」

沈黙。

暗黙の了解が、一瞬で崩れ去った。

「今更姉貴を狙ったって二度手間だろ？それならさっさと月夜霊を探せってんだ。だが、それとは違う力があるんだろ。…伍^{くみ}には」
うつむきながら話す。

伍という固有名詞をだすべきかださぬべきか迷ったあげく、その言葉^{ことば}を口にした。

更に気まずい雰囲気になるかと思いきや、鴻はいつもの調子だった。「そうですね。なんででしょう。あの人、だいぶ昔から第一部隊にいる気がしますが、最近とくに目立ったこともしてなくて。現役を引退したとかいわれてたのに、なぜ今になって動きだすんでしょうか。」

ききたくない名前をきいてもなお、表情をかえない鴻。

心のうちに何かを秘めているようだ。

「それは俺らにはわかんねーだろうよ…それで？お前、どこいくんだ？月夜霊でも探すのか？」

「いえ？まあ、月夜霊が見つければそれほど楽なことはないんですけどね、とりあえず第十部隊の本部にいつて幹部の方にお話しをきこうかと」

「なんの？」

「いろいろと」

微笑む鴻。なんだか少し、黒い。

鴻の目的がわからない。

最近何故か月夜霊の魔力を手に入れようと、彼を探す者が増えてきている。

そのうちの一人として、第一部隊の伍。

世界最強の治療師と名高い人物であり、鴻の実の母親である。

その伍が動き出したせいで、彼女の能力を一部継いでいるであろう鴻にも、白羽の矢が立ったのだ。

だが、ピコが知っている限りで、鴻に伍のような力はない。確かに、鴻は強い。

だが、鴻は治療なんて行わないし、そもそも伍とはまったく違った戦い方をする。

伍と鴻が母子であると思わせるのは、所詮容姿と人柄であるのだ。自分と姉とで戦法がまったく違うように、この母子もそう。

だから、鴻を狙ったって意味はない。それなら、彼はきつと自分を犠牲にして誰かをまもるのだろう。

いや、違う。

まもるように見せかけて、相手を利用するのだ。

鴻なら、そうする。

だからあわてて追いかけてきた。

無駄な犠牲者をださないためにも、鴻の身の安全を確保する意味でも。

動き始めている。

月夜霊という、一人の人間を中心として 世界が動き始めている。

呻いている。

誰もが、その膨大な魔力を手に入れようとして、呻く。

このままでは戦争もおこしかねない。何が何でもそれだけは食い止めなければ…

辺りが暗くなる。

二つの影が、森のなかに消えていく。

15・目的

そのころ、某所では危険な二人が接触していた。

女を象徴するものは、純白の髪、純白の肌、純白のドレス。その整った顔立ちは、まるでギリシア彫刻のようだ。

対する男の髪は鮮やかな深紅。瞳の色は深い闇を映した紫水晶。軍服のような服を着崩し、神秘的な空気を纏っている。

見事な紅白が、そこに生み出されていた。

女が口を開く。

「あなたが……月夜霊……？」

だが、男は口を閉ざしたままである。

ただただ女を睨める。

「私、伍くみというの。名前くらいはきいたことあるでしょう？」

腕をくんで返事を待つが、月夜霊が黙したまま、しかも殺気もなく自然体でいるので、

伍は

刹那、月夜霊のいた位置に、雷が直撃した。

光がおさまってから、その場所に再び月夜霊が現れた。

「さすがね。まあ、夢幻術師とはいえど、噂ほどの力量があるとするれば、その程度の幻術使えて当然よね。でも、さっきのあなたの瞬発力は素晴らしかったと思うわ。」

微笑を浮かべる伍。

伍は、腕を組んだまま一切動かずに月夜霊めがけて雷を落とすた。

月夜霊はあたかもそれを予知していたかのように、あたる直前にその場から消えた。

消えた、というよりは 消した、と形容すべきかもしれない。
その”月夜霊”は、彼自身ではなく、彼の幻覚であり 本体ではな
かった。

彼は、攻撃にあたって幻覚を消されるのを避けるためなのか
力を見せつけたかっただけなのか、よける必要もないものを、よけ
たのだ。

それを伍は賞賛する。

「心にもないことを…」

めんどくさそうに、月夜霊が口を開く。

「あら、そんなことないわよ？私の攻撃は、普通の人間にはあたる
の。それをあなたは避けた。もっとも、あなたは本体ではないよう
だけれどね。」

「それで」

伍の話をきかずに言う。

「俺に何か用なの」

それを聞いて、伍が目を見開く。

そして、あざけるような笑みを浮かべて言う。

「用って…。逃亡生活中のあなたが、用は何かと尋ねるだなんて。
面白い子ね。私の用は、ほかのやつらと大差ないけれど、少しだけ
違うわ。私、いえ、私たちは、あなたの協力をもとめている。」

「協力？」

「ええ、^{ソーサラー}魔導師を殲滅するの」

恐ろしいことを、笑顔でいいはった。

悪意の欠片もない、子供のような無邪気な笑みで。

「…それがお前らの目的か」

その笑顔をみてか、ため息をつく月夜霊。

「ため息…？あなたにとって^{ソーサラー}魔導師殲滅ってそんなにくだらないこ
と？わくわくするとは思わないの？」

「何故？」

きくことすらめんどくさそうだ。

「何故つて…。たくさん殺せるのよ？すべての魔導師ソーサラーを殺めて、人間の世界をつくつて、その世界から奴らの歴史を消すの。そうすれば、たくさんたくさん殺したって、罪にはならない。魔導師ソーサラーなんて、もともと存在しなかった。そういうことにするの。そうすれば、あなたのように世間に追われることもなく、大量虐殺ができる！…考えただけでわくわくするでしょう？」

「お前…」

「それで、どうせならあなたも仲間にしておいたほうが有利かなっていうね。一応、人間ヒトではいるんでしょう？…ってというのが、上の考え。」

その笑顔で、言っていることが本意であるかどうかを窺い知るのは至難の技だろう。

かたかった月夜霊の表情が、少しずつ変わっていく。

だがそれは、恐怖でもなければ不安でもない。ましてや怒りでもない、いろいろな感情がまじりあつた複雑な表情だった。

「生命を殺めることに罪の意識を感じないまでに…成り下がっているんだな、お前…」

「あなたに言われたくないわ」

「……」

答えることができない。

伍は構わず、残酷な笑みを続ける。

「それで、話は戻るけれど、どうするおつもり？…協力してくれないというのなら、第一部隊総動員であなたを政府の連中に突き出すまでよ。そうしたらあなた、磔磔にでもされるんじゃないかしら？」

「磔刑？……笑止」

一呼吸おいて、月夜霊は言い放つ。

「捕まえられるものなら捕まえてみる」

「…そうこなくちゃ」

お互い微笑を浮かべる。

世界最強と謳われし治療師と夢幻術師の
言い換えれば

全十六部隊を統率せし部隊と国際指名手配犯の
戦いの幕が
今、ここに
あがる。

「隊長！」

急に扉があいた。

駆け込んできたのは第八部隊幹部の一人、ナーレ。

今は現役を引退して非戦闘員をしている。

とはいっても、治療師としての腕は落ちていないので、負傷者がでれば真っ先に駆けつける。

第八部隊にはなくてはならない存在である。

そんな彼女が、突然資料室の扉をあけた。

「どうした？」

零がたずねる。

「アロールナへ出ていた者から、入電がありました。森のほうでロセさんが第一部隊らしき人物と対峙していると。」

「第一部隊?! あいつら…もうすでに…」
顔を見合すユラとなち。

ロセ率いる第二部隊と、なちの第十部隊との交友関係はほぼ0に近いが、

第二部隊については資料で読んだことのある程度に知っている。

「どういたします? ロセさんに救援をよこしますか?」

「…いや、救援はしなくていい。ただ、第三部隊にそのことを伝えておいてくれないか」

「第三部隊…? まつりさんですか」

「ああ。」

「わ、わかりました。あ、それとですね、南のほうで月夜霊を見たという目撃証言をいただきました」

「南?! ルザではないのか…チツ」

近くの棚から世界地図をとりだすユラ。

「なちが知ってる限りで、南のほうってどこに拠点があるの?」

細かい書き込みのある地図。

どの部隊の本拠地がどこにあるだとか、過去におこった事件の詳細などが、地名が読みにくくなるまで書かれている。

つい最近得た、なちの出身地（？）、ルザにある月夜霊の拠点、などといった情報もあった。

「そんないうほど南にはないよ。あつてナノチルかミクルラムだから。…アルヴェドの近くだったかな？」

「アルヴェド?! 傷害事件の…!」

ナノチル。正式名称ナノチルキャプトレス王国。大陸の東側にある隣国、中央朝帝国との国境には、まつり率いる第三部隊の本部もある。

その更に西側にあるのがミクルラム王国。間に大きな湖があるため、中央朝とは隣接していない。

以前にも説明したが、アルヴェド「アリオンはミクルラムの村の名前である。」

「それにしても神出鬼没ですよ。昨日はアロールナで…って、あつ。伝えてませんでしたね。昨日の話」

「アロールナでも目撃証言か」

「はい」

顔をしかめる零。

ずいぶんいろんなところに行ってるな。

大陸を縦断しているのか…? いや、違う。そんなことをする必要はない…。

とすると…もしかして

「出かけるぞ」

不意に零が立ち上がった。

「え、どこに」

「第十部隊本部に行く。案内を頼めるか、なち。」

そのころ第一部隊では

「えっ、月夜霊に会ったの!？」

「ええ。まあ、幻覚だったから戦えなかったけどね」

「いいなあ…私もはやくあつてグチャグチャにしたいなあ…」
病んだ笑みを浮かべる少女。

その傍らには微笑をうかべた伍くみの姿。

「そっいえばルキは？」

あたりを見回す少女。

「うふふ…今頃月夜霊側の勢力とでも戦ってるんじゃないかしら。」

「えっいいなあ。私も行きたい」

少女がそわそわする。

伍は表情を一切かえない。

「いつてきたら？月夜霊側勢力つていつたら、二、八、十くらいかしら？三と五は怪しいところね」

二はロセ、八は零、十は月夜霊、三はまつりで、五は… …

「ねえ、第五部隊の隊長つて…伍くみの」

「うふふ。とりあえずあなた、暇なんだつたらどこぞの部隊制圧してくれば？」

案の定話をそらされた。

これ以上追及したら怒らせるかもしれない。

「う、うん。わかったあ」

少女は足早に部屋をでていった。

少女がさったあと、伍は天使のような風貌とは真逆の、邪悪な笑みを浮かべる。

月夜靈率いる第十部隊の本拠地に、来訪があった。
白い髪の子と、赤い目をした

「…ユラさんですか？」

「はい？」

出迎えた隊員らしき人物が、赤い目を見つめた。

「えっと、人違いでしたか？ すいません、自分新入りなもので。」

「…ユラって女性名だと思わない？」

赤い目は怪訝な表情で問い返した。

「す、すいません。目が赤かったのだから…。それに、うちに来訪なんて滅多にないですし。」

「…ってことは、僕は零だと思われてるのかな？」

「えっ」

隣にいた白い髪の子が笑顔できく。

新入り隊員は恐る恐る口をひらく。

「鴻さん、ですよね？」

「あ、知ってるんですね」

な…んだという顔をしている。

新入りのほうはとても不安そうである。

「知ってます。全部隊の隊長さんの顔と名前は頭にはいつてますから。」

「へえ。まあ普通そうですね。てことは、知名度ひくいのはピコだけですわね？」

「…」

赤い目をした 少年、ピコは
考えていた。

気に障ったのは、知名度がどうのこうのではなく、ユラと間違われ

たこと。

確かに、髪の色も目の色も大して変わらない。
だがそれが気に入らない…。

「それで、君にとって『ユラ』ってどういう人なの？」
尋ねてみた。

鴻がそれをきいて微笑む。

「どうって、第八部隊副隊長さんですよ。それに、隊長の弟子だ
ったときいておりますから…。」

「隊長？ああ、月夜霊のことね…。つまりは何、尊敬してるとか、
そういうの？」

「尊敬といますか、一度はお会いしてみたいですね。どんな方な
のか、気になりますから。」

「へえ、そう」

何ともいえない。

それはそうだ。ユラは月夜霊の弟子。

月夜霊に次いで才のある夢幻術師。

ただでさえ知名度が高いのに、月夜霊率いる部隊では、有名人とい
う枠組みを通り越している。

わかっていた。

…わかつている。

ピコが物思いにふけている、そのときだった。

「鴻とピコじゃねーか？」

後ろから名前をよばれた。

振り向くと、それは今一番見たくない顔だった。

「零？それに」

鴻が無表情で返事をする。

「姉貴…」「ピコ…」

ほぼ同時だった。二人とも同じような、怪訝な顔になる。

だが、新入りの目線はもつと低いところにあつた。

「お、おかえりなさいませ副隊長…！」

いつきに震え上がっている。

「た、ただいま」

その初々しさが気持ち悪いのか、副隊長とよばれた彼女は戸惑った。「あなたが第十部隊副隊長のなちさん。お会いするのは初めてですね。鴻です。今後お見知りおきを。」

「鴻…。あの雷神の二つ名を持つという第五部隊隊長の…」

「あの、皆さん、宜しければ中にお入りください」

「気まずい雰囲気なのか、新入りがわって入る。」

「お邪魔してもいい？なち。」

「あ、うん！どうぞ！」

態度が急変する。

ユラは微笑んで、門をくぐる。

それを見た新入りが、つぶやく。

「ユラ、さん…？」

「はい？」

笑顔のまま反応する。

何かわからない感情によって、新入りは凍てついてしまう。

しばらくして我にかえると、今度はユラとピコを交互に見る。そして一言、

「そっくり…」

その言葉で、二人から同時に鋭い視線をあびせられることとなった。

「もう、いい加減にしてくださいよお二方。会うたびに睨みあいだなんて、あなた方本当に姉弟なんですか。きいてあきれますよ。」

鴻が二人の殺意を鎮める。

そしてなちが空気をよむ。

「あんたぼーっとしてないでお茶の一つでも入れてきたらどうなの」

「は、はい！今すぐ！」

そうして隊長、副隊長だけになった。

広間にいた隊員たちは、はやくに部屋の奥へと非難している。

この雰囲気呑みこまれる前に、階級の低い者はその場から消える、

それが一番の安全策なのだ。
だが、ひとつだけ欠けている者がある。
第八部隊、第五部隊は隊長、副隊長といえるのだが、第十部隊はな
しがない。

その暗黙の了解を、零が崩す。

「さてと、月夜霊探しにいくとするか」

一瞬あたり一面が凍りつく。

「な、何をおっしゃってるんですか隊長。ここにきて、搜索、です
か？」

「いやあ、もしかしたらあそこにいるかも知れないから。一応な。」

「え、あそこって？」

再び啞然とした空気になる。

「ま、黙ってついてくりゃわかるって。…あー」

「僕たちはここにいたほうが良いみたいですね」

「理解がよくて助かるよ、鴻」

「それはどうも」

そうして零は奥の部屋へと入って行った。

それに続いて、ユラとなち。

その後ろ姿を見送る鴻とピコ。

「何考えてんだろ、零のやつ」

「月夜霊の一番の理解者だからね」

あ、鴻がタメ語……

「どうかしました？」

「いや、真剣だなって思ってた」

「…まあ、真剣にもなるでしょ」

「そ、そうだよな」

資料室。

その資料の数は、第五部隊や第八部隊に勝らずとも劣らず、といったところだ。

「これほとんど月夜霊が集めたんだろ？」

「うん、そのはず。でもなんで資料室？」

なちが辺りを見回す。

三人のなかで一番よくこの部屋をしっているはずなのに、何故か初めてきた場所のように思えてくる。

「お前、知らないのか？ここには地下室があるんだぜ」

「…は？」

そういつて零はひとつの本棚に手をかけた。

そして、スライドさせる。

「隠し扉…！」

そこから現れたのは、案の定扉。

それをひらくと中は地下へと続く階段だった。

「し、しらなかった。」

副隊長が呆然とする。

気が付いたら二人がすでに半分ほど降りていたので、追いかける。

「意外と明るいですね、中。」

「そりゃあな。」

そして、ついた地下室もまた、

資料の宝庫だった。

「なんでこんなな資料があるの…？いつから… …あれ」
奥のほうに人影があった。

「あれってもしかして… …」

予想は的中した。

彼らがさがしもとめていた人物がそこに

「うそ……月、様……？」

「つつくん……？」

あたり一面資料の束。

その中央におかれた机。

そこで、何等かの作業をしているはずの彼、月夜霊は……

「い、生きてる……のよね？」

「え、嘘……ま、まさか……しんでないよね……」

「疲れて眠ってるだけだろ」

女子二人は開いた口がふさがらない状態だというのに、零だけは平然としている。

「毛布もつてきてやってくれないか」

「は、はい……！」

「な、なちも行くよ！場所わかるから」

身体が衝動的に動いていた。

何故か、会いたかった人にあえたはずなのに、この場から離れたい。二人ともそんな気持ちだった。

一人のこされた零は、散らばっている資料のファイルをめくった。

ここにいると思ったんだ。

各地で目撃証言。それはつまり、自分の幻覚をつくりだし、同時に各地を調査して情報を得ているということになる。そうだとすれば、どこかですべての情報をまとめあげる「幻覚」もしくは「本体」が存在するはず。……なら、ここしかないと思った。

「ん」

そのとき、寝ているはずの月夜霊がぴくりと動いた。どうやら気付いたようだ。

「……零？」

「お、おはよう」

「……」

状況が理解できず、黙り込む月夜霊。

寝起きのわりには、意識がはっきりしているようだが……

「お前、今、本体か？それとも幻覚…か」

「…はあ。どっちだと思う」

「んー、どっちだろうな。でもお前、今相当な数の幻覚づくりだし各地に展開させてんだろ？幻術師にとつては朝飯前だが、お前、夢幻術つて要するに幻術の弱い版だろ？魔力大丈夫なのかよ？」

「攻撃魔法の威力が弱いつてだけで魔力自体の性質は同じだから、問題ない」

目線を合わせない月夜霊。

「へえ…つてことは、夢幻術師のほうが魔力的には強いから、幻術自体は得意なのか。」

「なにがしたい」

横にあった資料をめくりはじめる月夜霊。
それを覗き込む零。

「お前、相変わらず綺麗な顔してんのな。女装しても気づかれねーだろ。」

「は？」

「童顔つてやつ？」

「要件はそれだけか？」

無理やり片づけようとする月夜霊。

その資料をめぐる手の上に、零は自らの手を重ねた。

それによって、目があう。

「ずっとここにこもって作業してたのか？しばらく見かけねーから心配だったんだぜ、一応」

「は、心配だつて？お前が？気持ちわる」

「…いつてくれるじゃねーか。さすがは俺の義兄貴といったところか…。で？なんの資料集めてんのさ？世間がお前の魔力欲しがつて動いてるつてときに、のんきすぎねーか？」

「俺の魔力、ね…」

「そう。お前の魔力。お前…もしかして自分が世界最強の夢幻術師だつていう自覚ねーの？お前のために伍まで動いてるんだからな、

「こわいこわい」

「…はあ。俺の魔力を手に入れて魔導師ソーサラーを殲滅するんだとよ。…ま
ったくくだらない話だよな」

「魔導師殲滅…?! 第一部隊はそんなことを考えているのか?!」

「だから第一部隊について調べてた。ていうか、ずっとここにこも
ってるわけないだろ…。ちゃんと外でてる。だから伍にも逢った。

それでまあ、三日前からここで作業してたんだがな」

「それで疲れ切って寝るとかやっぱ可愛いな、お前」

「はっ」

「あ、おかえり」

その言葉で振り向く月夜霊。

そして、その顔を見た女子二人は

「あ……」

もっていた毛布を床におとす。

目がうるんでいる。

「うそ……」

涙が零れ落ちないよう瞬きをこらえるユラと、

震えながらも一歩ずつ前へと踏み出しているなち。

それをみた月夜霊は、かすかに表情を柔らかくし、軽く両手をひろ
げた。

その胸に、なちが飛び込んだ。

飛び込んで、そして泣き出した。

「会いたかったあ…会いたかったよお…」

「数か月あってないだけだろ、そんな大げさな」

月夜霊にしては珍しく、声色が優しい。

「どこにいったの」

「どこって、各地に行ったり来たりだよ。結構ここにも帰ってきた
んだが。お前とはいつも入れ違ってあえなかったな。」

「私…自分勝手だったんだあ。だって、私のこと連れて行ってくれないじゃん、いつも一人で危険をおかして…それでなち、カッとな

「つちゃって一時期つくんのこと嫌いになって…それで、それでバカなことしまくって責任なすりつけてたのに、いつもやさしいんだもん！だってわからないんだもん…！」

「それを後ろで見ていたユラも、ついにこらえきれなくなった様子。」

「でもね…教えてもらったんだ…だからもう、バカなこととしてつくくん困らせたりしたくないから、だから、あいたかったの…！ごめん、ごめんね」

「…」

「あ、ユラ…ごめん」

「なちがユラのことを思い出して月夜霊から離れると、」

「ユラと月夜霊の目があった。」

「なちにむけていた父のような、兄のような眼差しではない。」

「だが、何かを秘めている。それは、ユラだからこそわかる感情であり…。」

「ユラはかしこまりながらも近づき…」

「少しずつ」

「少しずつ、手をまわした。」

「…また、背がのびたんじやないですか…？」

「そうか？ユラが縮んだんだろ」

「だって見るたびに…大きな存在になっていくんですもの…月様」

「懐かしい響きだな、それ」

「微笑むユラ。」

「…昔のこと思い出したんですよ？ルザの山奥にいるなんてきいたから…」

「ああ、ルザね、確かにこの間行った。」

「そんなうろろしててよく捕まりませんね」

「何だ、お前は俺につかまってほしいのか」

「…そんなはずありませんよ。だって月様何も悪いことしてないじゃないですか！それなのに…」

「何も、悪いことなんてしてない。」

たくさん人間や魔導師を殺したから指名手配されてるんだけど、あれは正当防衛だった…！そのあと色々と事件をおかしたとかきくけど、調べてみたらどこぞの副隊長を庇ってたり、王族かもしれないしただの貴族かもしれないお嬢様を匿うため、とか、他人のために自分を犠牲にしすぎてるだけなの…！何も悪いことなんてしてない…！政府は何もわかってない！

「いいんだよ」

「どうして…！」

「俺を捕まえられるやつとかいねーだろ？」

「…ふふっ それはそうですね」

ユラが微笑む。

隣で涙をふいているなちの頭に、零がぼんと手をのせる。

「それで零…何か用があつてきたんだろ」

ユラをかるく抱いたまま、零に話しかける月夜霊。

「ああ…用、な。まあ、あるっちゃあるけど」

「第一部隊のことか？」

「ふん、お見通しってわけか。まあ、そうだな、話そう、月夜霊」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2388q/>

聖ノ性

2011年12月16日00時48分発行